

修学旅行前と後

自問する日々の始まり — 島本政志

先日、現在担当している6年生の修学旅行が終わりました。特に大きなトラブルもなく、非常におだやかな心地よい修学旅行だったと思いました。

さて、学年崩壊の6年生を担当している時の修学旅行について述べたいと思います。エスケープ集団もさまざまな取り組みにより2学期は半数まで絞りこむことができたしかし10名にはほとんど効果がありませんでした。このような状況での修学旅行前の指導や対策について述べたいと思います。

1. 勤務自治体初の「参加確認書」

小学校としては異例の、修学旅行の参加確認書をすべての保護者に提出してもらうことを校長が決断しました。

学校の危機的な状況から、校長が教育委員会、PTAや地域の役員とも相談して、このような書類を作成することになったので

す。いくつかの項目があるが、重要なのは

規則・ルールを守り、他人に迷惑を掛けず
絶対に教職員や関係者の指示に従います。

問題行動で家庭に連絡を受けた場合は、
保護者の責任のもとで引き取りに行きます。

という項目です。

金髪、茶髪の状態で提出してきた子に対しては「内容をお母さんと読んだか？受け取れません」と突き返しました。

エスケープが改善されない、指示に従えない場合は「授業の不参加、抜け出しが続いており、所在が分からない時間が長い状況です。このような状態で安全面を保障しながら修学旅行に連れていくことは、極めて難しい状況です」と保護者に伝えます。

学校は安全を第一に考えている、ということに関しては批判できるものではないからです。

当然、子どもにも「授業妨害、エスケープがつづくということはみんなと集団行動できないということ。そんな君を安全に引率することはできない。」と伝えていました。

2. 「安全が保障できない」

保護者との話し合いでは、余計なことは取り上げません。「○○くんは暴力を振るった」等の案件は、事実関係で争うことなる場合が多いので触れてはいけません。また、「がんばっている部分もあるんですけどねえ」等も言いませんでした。言うけど、「がんばれる部分があるのに、がんばれへんのはお前の指導があかんからちゃうんか？」「もうちょっと様子を見てやれよ」と切り返してくる可能性があるからです。保護者のご機嫌をとるためのリップサービスは不要です。

教師「修学旅行中に普段のように居場所が分からなくなると、困ってしまうんですよねえ…。何とかがんばってほしいんです

けど…。現状では安全を保障することが難しい状態です。困りました…。」

保護者「それを考えるのが教師の仕事やうんか？」

教師「おっしゃる通りです。ただ我々もあらゆる手段を考え、教室に入るように声を掛けたり、話し合ったりしてきたんです…。」

保護者「お前らがなめられてるから、抜け出すんやろが。怒鳴ってみたか？」

教師「いやあ、お恥ずかしい話ですが、怒鳴ったりもしました。けど、改善されません…。ちよつと現状では出先での安全が保障出来ないんですよ…。」

お父さんの言うことなら聞いて安全に参加することができると思っんです。お父さんかお母さんが同伴していただくことはできませんか？」

結果、実際に修学旅行先の近くで待機してもらった保護者も複数いる。

また、先ほどの問いかけに対して、「そんなもん、行けるか！」と言われれば、「では、どうされますか？」と保護者に判断を委ねる。最終決定は保護者がするという形をと

るのである。

3. 実際どうなったか。

①喫煙者が四名。トイレで喫煙し、証拠隠滅に窓から吸い殻を捨てていた。

②部屋移動を禁止していたのにも関わらず、複数の女子が男子の部屋にいた。(男子の布団の中にくるまっている者が複数)

③内線電話で教師を挑発するようなことが起きた(事前に内線を切ることを宿泊施設に伝えたが、進公共施設であり、一般客もいることから「申し訳ないが、できない」という返答だった)

④他の学級ではバス移動の際にも車内でけんかが始まり、また見学先でも殴り合いが始まった(私のワイシャツに鼻血が飛んできたのを覚えている)

⑤ほとんど立ち歩き自由の車内。

⑥実際に、参加を認めることができない児童が出た。私たちは前日の夜十時過ぎまで複数の保護者と話し合いをしていました。

4. 殴った方がいい

何とか修学旅行を終えても、その後が非

常に苦しかったです。

参加同意書は修学旅行までは一定の効力を發揮していましたが、終わってしまったえば、教師が使える有効なカードが無くなってしまうわけで、荒れがひどくなったように感じるときもありました。

このようなことはある程度、学校側も予想していたのですが、それでもこのような対応をするしか方法が無かったです。

本当に「毎日、毎時間を凌いでいる」という感じでした。

毎日のように起こる対教師暴力、暴言、授業妨害、器物破損でだんだんと私のこころも壊れつつありました。

「言っても分からんやつは殴った方がいい」「殴って分かるならそれが教育やないか」と本気で思うようになっていきました。

一方で「こんな気持ちを持つべきは教師と言えるのか・・・これが教師の仕事なのか？」と自問する日々が始まっていきました。

放課後、夜、窓に反射する自分を見て、そんなことを思うようになりました。